

1.8. ウィーン便り (8)—— 国際原子力機関 (I A E A) に勤めて : 国連の職場から (2002.5)——

元日立事業所燃料サイクル部 小西俊雄

「ウィーン便り」の始まりは「国連も職場の選択肢」と考える人へ参考情報を供することだった。

国連は戦争の脅威をなくし、普遍的な平和を達成するための場として創られた。そして昨年、組織としてノーベル平和賞を受章した。I A E Aもその一員としてやはり喜ばしい。貧困、人権、健康等多くの課題について専門機関が連携、横通ししつつ問題解決に努力している。その多くは「南北問題」である。先進国と開発途上国の間の格差解消であり、そのための支援である。I A E Aは原子力の平和利用推進とその担保が使命である。私はそこで、「原子力」で育った経験を「水」という課題に活かす形で仕事をさせてもらっている。問題の解決に「参加している」実感が持てて幸せである。働く場所としての眼で国連を見る人が増えても良いのではないかと。多少固くなるが、その視点からの話も入れて今回は職場で拾った話題を書く。(正面広場の「平和の鐘」は横綱貴乃花を迎えての寄贈式だった)



・国際貢献ということ

高度な政治外交的なことは書けない。一職員として感じたことを書きたい。

日本は「人的貢献が足りない」と言われる。「お金の援助」は国連分担金を凡そ二〇%も拠出しているのだから十分過ぎるくらいである。「技術大国」なのだから「人的貢献」もできる筈である。まず、個人レベルでは「自信を持って国際社会に出て欲しい」と言いたい。国連機関は多岐にわたる。どの技術分野の人も（自然科学に限らず、人文科学でも、社会科学でも）働ける。冒頭で触れたように国連では開発途上国との関係を避けては通れない。そういう国への関心があれば誰にでも職場がある。開発途上国への愛情と、少しばかりの冒険心があれば鬼に金棒である。私は原子力で育ったから I A E Aになっただけである。専門職なら学位はある方が有利であり、仕事もやり易い。

次に、国、社会には「優秀な人を出す」ことを望みたい。優秀な人は自分の国、社会にとっても大事な人、出しにくいのも事実だが、質的に高度な貢献をするにはやはり優秀な人が必要である。私がそうだとする気はもちろんない、私はむしろ逆に近い。だからこそ、もっと優秀な人を、「出しにくい人をこそ出す」気運とそれを支援する仕組みが欲しい。流行の言葉で言えば「痛み」を伴うかもしれない。その痛みを和らげる施策と制度を望みたい。採用ミッションが時に日本を訪れているが、情報が広く行き渡っているようには見えない。原産や学会等が音頭を取って、現旧職員と連携して情報交換の場を定期的に企画しても良いのではないかと、帰国休暇に旅費がつくのだから現職職員がそんな場に顔を出すことを制度化しても良いのではないかと。

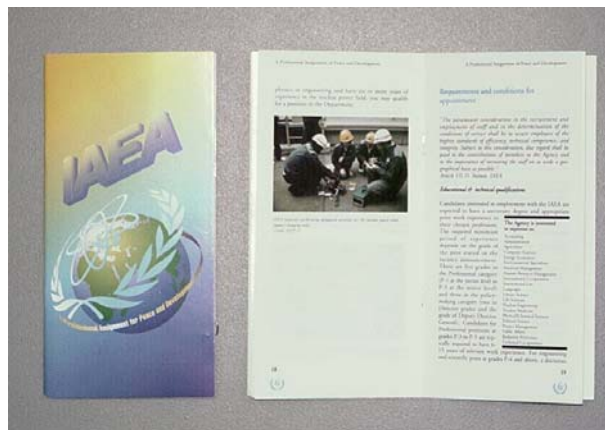
最後に、そして本当はこれが一番言いたいことである。「受け入れ側」、つまり援助を受ける開発途上国側の姿勢である。援助を受けるには「自分にも努力が必要」との意識を持って欲しいのである。「学ぶ意欲、努力」がなければ、いくら教師が教材を揃えても、実技指導をしても身に付かない。先進国ではよく分っていることだが、それが長年の蓄積であり、その維持のために努力もしている。開発途上国は今からそれを経験しようとするのだから、先進国以上に真剣になってもらいたいのである。身近な例を私のテー

マで考えて見る。「原子力淡水化プラントを導入したい」と少なからぬ国が手を挙げている。が、IAEAから資料をもらって、お金を貸してもらえば明日にでも「原子力淡水化プラントから飲み水が得られる」と思っているような節の国もあるのだ。僻地の人が、「ここに快適な邸宅が欲しい、設計は頼む、資材も頼む。『本で勉強している』ので建設には協力できる。ただし金がないので貸して欲しい、完成後の維持管理も難しいことは頼む」と言っているように響く。「頑張り」という言葉が蘇る。日本だって韓国だって「外からの援助」と「自分の頑張り」で今日に来た。独りで大きくなった訳ではないけれども、努力もしてここまで来た。今やその点で日本は韓国に追い越されそうだが、開発途上国側も努力してこそ国際貢献も実効があがり、国連の使命も達成できて行くのではないか。

・ IAEA と邦人職員

出資金の割に少ないことは既に記した。現在約四十余名である。私の赴任当時から多少の変動はあるがほぼ同じ水準である。が、回転は早い。六年生の私が有期契約者としては最古参である。日本から来ている人の派遣期間が二、三年と比較的短いのである。派遣側とすれば「経験を積んで早く現場復帰を」と望むからだろう。派遣側機関には帰国したあとその「経験、人脈」が有効に働く職場に戻すことを期待したい。「正規職員」はどうか。組織としての「ローテーション原則」があって各ポストの契約は通常五年、長くて七年である。さらに続けるには「公募」を通して別のポストに移ることになる。

「もっと邦人職員を増やしたい、しかも計画作りに関与する上級職員を」と言うのは日本政府の大きな目標である¹。邦人職員の増員は「出資枠に応じた適性数」を望む採用側にも働く論理と聞いているのになぜ増えないのか。語学の問題もあるだろう。がより大きいのは「帰国後の職場」だろうか。国内でも「出向」で職場を離れることに抵抗感があるのだから、国外となるとその心理的壁が高いのか。給料の額面が



(職員募集のリーフレット 職員募集のリーフレット)

下がるのも心理的要因だろう。日本よりは安く生活できるのだが、と思う。

リストラあり、国際的な企業合同ありで我々の時代より遥かに日本でもモビリティはあがっている。なにより、これからの人がそういう社会を作っていくのだからもっと外に眼を向けて良いのではないか。卒業と同時に国連に職を求める若い人もいるが、実社会での経験ある人の方がより実務的に貢献できるように思う。

・ 「国連文化」

「職場編 (後編)」で「国連文化」という言葉を使った。一言で言うならビュロクラシーであり、「お上意識」である。民間文化に育った私には抵抗感が消えない。いくつか例を挙げてみる。

- 権限委譲が不十分。会議の設定、日程変更、出張等全てに事務次長の決裁が必要である。
- その照査・承認に時間がかかる。他部局との調整が絡むと一枚の手紙発信に半年要したりする。
- 予算実行も権限委譲が不十分。計画段階で枠が各部課毎に認可される予算だが実行は事務次長権限。部課長の一存では実行できない。次長補佐の「こわいお婆さん」が不在だと決裁が滞る。

¹ 部局長級が三名、課長級が三名である。これも私の着任以来ほぼ一定である。いかにも少ない。国、社会、個人を有機的にモチベートする、行政上の対策がやはり必要だろう。

- 情報伝達（上奏、下達）の時間が長い。全てが書類ベースになるのは多文化社会だからか。
- 依頼が時に無視される。「自分にその情報はないから答えられない」となぜすぐ返事できないのか。これは「国連文化」なのか、ある国の国民性なのか。個人の性格にしては結構経験する。「忙しくてできなかった」と期限後に言って来た極端な例もある。「こんな担当者は要らない」と言わざるを得なかった。それをも受容するのが「国連文化」なのかと皮肉りたくなる。

もちろん良いこともある。その方が多いと思いたい。

- 技術情報もだが、総会や理事会で各国の開発方針、政策、動向等の最先端情報が得易い。大きな事故やテロ直後には緊急会議があり、世界政治の最先端に関わっていると臨場感がある。
- 職員は概ね誰も協力的で助かる。会議の目的に合った参加者を探す時に、有力な情報源になってくれる。「お互い様」である。日本の専門家紹介の相談も当然受ける。「先進国、経験国の情報を」という要望は強い。開発途上国が何を求めているのかも掴みやすい。
- ドライな文化、習慣は時に日本人には苛立ちの原因となるが、同時にストレスを解放してくれる。
- 異文化を肌で理解し、振り返って自分の国の長所短所を知り得るのは最大の特典であろう。そんな中で私自身は離れている期間が長くなったからかアジア圏、日本文化に回帰感を覚えている。



（総会では並行して各種の展示もある）

・ことば

繰り返す必要も無いが、多彩な言語環境である。職場誌が最近、「異文化に耳を傾けよう」という事務総長のスピーチを職員の協力で各国言語に翻訳、特集した。私には日本語の依頼がきた。集まった言語数がなんと五十を超した。それだけの人が周りにいるのだ。

私も「ことば」には興味がある。と言っても「物好き」の域を出ない。学生時代にはフランス語教室に顔を出したり、自主講座のロシア語教室に参加したりしていた。後年、スペイン語を自己学習した。今、残っているのは簡単な挨拶語だけである。が、こんな「ことばかじり」が国連では遊べるのである。片言でも「おはよう」とか「こんにちは」と言うだけで、親しくなれる環境がある。「ありがとう」が加わるとさらに親交は深くなる。私の語彙に「ありがとう」のアラビア語、ハングルが加わった。

一方で「ソリー」が強い拒絶の言葉だと知った。我々が気楽に使う「すみません」とは全く違う。仕事を頼んでも、相談を持ちかけても「アイムソリー」と言われたら、説得を試みてもほぼ無駄である。諦めた方が早い。本当に出来ない場合は勿論やむを得ないが、真意は「やりたくない」でも、「早く飲みに行きたいから」でもこれは固い拒絶なのだ。担当業務について一筆書いて貰おうとしたり、アラビア語の手紙を受け取って「斜め読みで大意を」と頼んでも、「アイムソリー」と来たらそれまでである。

・ハードウェアとしての国連ビル

市の北東部に今の国連ビルが開所したのは1979年。周りは広漠とした野原だったという。「大都市」のイメージもあっただろうウィーン市内にそんな地域があったとは想像に難い。市の中心からなんと7kmの

距離である。そこに100mを超すモダンなビルが建つ。国際設計コンペに勝ったのは地元オーストリアの



(私が着任した頃にドナウ対岸から望んだ国連ビル群)

建築家と聞いているが、その斬新な姿に賛否両論あったのではないか。赤い屋根、石造りで高さの揃った市内の建物とは桁違いにモダンでコンクリートの塊に見える。最近では周囲に高層ホテルなどが建って目立たなくなったが、私が着任した頃は地区唯一の高いビルだった。平面的にも特徴ある設計である。数学的に表現すると直角座標ではなく百二十度の斜角座標で中心から三方向に伸びたウィングの一端で隣の棟と連絡している。

建物からは、新旧ドナウ、バルカンの平原、アルプス東端の山並み等の景観が楽しめる。私の居室は二十五階にある。訪ねてきてくれる多くの人が居室からの眺めを喜んでくれる。私も好きな風景で幸せである²。職員の執務室は原則個室である。秘書や若い新人も同じである。私生活でも個室環境の文化だから当然かも知れないが、その個室の扉が閉じているときに疑問に感ずる。やはり入りにくい。ノックはするにしても一種の踏ん切りが必要である。部下や同僚が気安く話し込みに入れるような雰囲気が私は好きである。私は扉を常時開けている。「扉を閉じる」のは欧米人、特にヨーロッパ人に多い様だ。

現在全館改装の準備が進んでいる。断熱材中のアスベストを取り除くためである。各ビルの区画毎に工事が進む予定で、その間そこの居住職員が数ヶ月「避難生活」をするプレハブ建物が中庭に仮設された。全改装工期十年にも及ぼうという大作戦である。この仮設建物はその構造から「コンテナシティ」と呼ばれている。零下十度に近い冬の外気の中で建築中の金属色建物はいかにも寒々しく見えた。「アスベストも困るが、この避難生活も惨めそうだ」と誰もが思っている。「幸い」私の居室区域の避難生活は離任後になるらしい。その改装費用は基本的にオーストリア政府が全額負担してくれるようだ。

・ 「安全」について思うこと

業務とは直接関係ないが、滞在中に起こった日本の原子力事故の印象を簡単に記させて頂く。「もんじゅ」とJCO事故である。

共にショッキングだった。「え！何が起きたの？」が第一印象だった。まず「もんじゅ」漏洩事故。着任一〇〇日目の早朝、出勤前に同僚の日本人から電話が入った。着任直前まで自ら携わった「もんじゅ」で何が起きたのか。「漏洩規模は数立方メートル」「放射性ナトリウム漏洩か」との誤報が二、三日飛び交った。「ついに日本でも起きたか」と関係者の驚きを肌で感じた。「安全神話」が崩れたかという技術的問題以上に「情報操作」が気持を暗くした。あれから六年。高速炉の技術はきっと必要になる。この事故を貴重な教材として「頼れる技術」として完成させて欲しいと願っている。「完全な安全」は存在しない、必要なのは「頼れる技術」だと思っている。国によって異なる「事故」への対応の仕方が異なる。接した十指に近い専門家は全て、「事故は起きるもの、起きたら民衆に話す、そして改善する、その積み上げで信頼を築く」姿勢を語った。今、日本もそうなりつつあると思う。「急がば回れ」という名言がある³。

²最近では周囲に高い建物が増えて眺望の素晴らしさが少々失われてきたのが残念である。

³「隠すより顕わるるはなし」という言葉を入社直後、大先輩から教わった。何度も味わって生きてきた。

日本の原子力を考えさせる事故が続いた。東海村の再処理施設の火災事故、そしてJCOの臨界事故。そのいずれもで「安全管理」が問われ、「情報管理」が問われた。事故のレベルが次々と高くなり、ついに死者を出した。JCOの事故は一九九九年のIAEA総会初日だった。「臨界」と聞いて、「まさか！臨界防止管理をしているはず」と言葉に詰まった。「もんじゅ」の時に比べて情報は早かった。四日後の総会最終日には全体会議場で「状況報告」があった。事態の初期にいち早く「臨界」を推理した安全委員に敬服する一方で、「あの事態なら明らかに臨界事故しかあり得ない」と事後にしたり顔で解説する「安全屋」には耳を傾ける気になれなかった。「そんなものは自明だ」と言う人の目には、謙虚な人には見える教訓が見えないのではないか。そこに事故の再発ポテンシャルが潜在すると言うと悲観的すぎるか。

高度成長時代の歪が出ているのだと言う人がいる。新幹線のコンクリート脱落等等。そうだろうか。日本は走り過ぎたのだろうか。もう少しゆっくり走れば事故は防げるのか。そうとも思えない。ゆっくり走っているようなヨーロッパでも事故はある。オーストリアでも2000年、トンネル内のケーブルカー火災で乗り合わせた日本のスキー研修生等が多く犠牲になった。イギリスの列車衝突、米軍訓練機に因るゴンドラ落下事故もあった。それは走る速度ではなく、「安全管理」とのバランスなのだ。そして、日本は高い信頼度でそれを追求してきた筈なのだ。真面目に、謙虚に教訓に学べば一層安全な技術になると信じたい。慢心を遠ざけ、謙虚を大事にしたい。



(第一次大戦直後ロシア兵捕虜の慰問目的に建てられた国連横のロシア教会)